尚絅学院大学の設置準備をふりかえって

渡　部　治　雄（初代尚絅学院大学学長）

理事長の深田寛先生から大学設置についてぜひ意見を聞かせてほしいと連絡があり、仙台松陵教会の牧師館に先生をお訪ねしたのはたしか2001（平成13）年８月だった。信仰上の恩師である先生とはいつも連絡をとりご指導を願っていたので、私が大学設置･学校法人審議会（大学設置分科会）の委員をつとめていたことをご存知だったからである。牧師館に学院長の大崎節郎先生もおられ、専ら私が両先生から質問を受ける形で話が進んだ。記憶も薄れてしまっているが、次のようなことを申し上げたように記憶している。

（１）　文部科学省（以下、文科省）と大学設置審議会（以下、設置審）は４年制大学の設置を、短期大学（以下、短大）の４年制化というよりも、あくまでそれとは別種の新しい大学の創設として取り扱っている。

（２）　学部、とくに学科の名称は高校生にもわかり易いことが大事で、難解な学科名は設置審で変更を求められることもある。

（３）　教員の研究能力の審査があるので、研究に専念してもらうために特別な措置をとるなど万全を期してほしい。

（４）　教員の教育能力については個々の教員よりも教員集団の教育能力を高めるためのFDが重視されるようになってきている。

（５）　面接審査や実地調査では学長や学科長の予定者が重要な任務に当たることになるので、それらの方々に申請書の作成段階から参加してもらうことが望ましい。

1992（平成４）年をピークに18歳人口が減り続けているので申請は早いほうが良いのだが、来年申請できるのだろうか。心配はしていたものの、米沢女子短大での６年の任期満了をひかえ残務整理に没頭していた私は、進捗状況をお聞きする心の余裕をほとんど失っていた。そんな私が、１月25日の理事会決定までは内々のことであるが、学長予定者となることを含みとして４月から準備作業を手伝ってほしいとの要請を受けたのは年末になってからで、迷いに迷った末に「では考えてみます」とお応えしたのは年末年始休暇を終え明日米沢に帰るという１月３日の夜だった。躊躇したのは、母の介護を妻に委ねたまま６年間単身赴任を続けた後ろめたさを払拭できなかったからである。しかしその一方で、永い間信仰を育てて下さった深田先生の願いにどうにかして応えたい、イエス・キリストの御名によって建てられた尚絅のために献身する道を神が深田先生を通して私の最後の仕事として備えて下さったのではないか、という思いを捨て去ることはできなかった。

設置準備室の三浦忠一さんと小島里美さんが文科省との打ち合わせに備え急ぎ相談したいというので、３月27日朝、設置準備室長の大崎先生と菊池雅人事務局長への挨拶を兼ね尚絅にうかがった。１年近く住んだドイツ・ゲッチンゲンの早春を思わせるようなすべてが柔らかい光に包まれた、あの「ゆりが丘」の風景を懐かしく思い出す。３月29日（金）山形県庁で退職辞令を拝領し、米沢に帰り退職者に辞令を渡し、教職員に別れの挨拶をし、６年間の務めから解放された。ほっとしたのも束の間、年度が改まった４月１日、母の病態が急変し、尚絅で

の辞令交付式にも出席できず、当分出勤できなくなるのを見越して三浦さんに母の入院先までご足労を願い、明日からの作業日程を確認するというあわただしさだった。母は、私が仙台に帰るのを待ちわびていたかのように、翌４月２日に天に召された。

葬儀など一切を終え４月８日から尚絅通いが始まった。FD の記録の整理と計画の策定、学部・学科の名称の見直しが最初の仕事だった。文科省との打ち合わせで、FD について必ず記入してほしい、人間科学部と心理環境学科という名称の意味内容、カリキュラムとの整合性が不明確なので設置審の意見によっては変えてもらうかもしれない、と言われていたという。大崎先生と相談の結果、文科省の指摘にも合理性があり、早急に見直すこととした。もし設置審の総合審査で変更が必要と判定されれば、既に配布した印刷物を新しいものと差し替えねばならず、学生募集にも影響が出るからである。翌日から東北大学附属図書館で参考文献を読み、午後は三浦さんと小島さんと分担し FD 記録の整理と今後の実施計画案づくりに集中した。その結果、人間科学部を総合人間科学部に改め、その趣旨を次のように記載した（『設置申請書』参照）。

「本［総合人間科］学部は人間を「こころ」と「からだ」の統合と考える立場から、生命活動を支える食と健康の視点からみた人間の「からだ」の問題と、社会環境の変化に揺れ動く精神活動の主体としての人間の「こころ」の問題について、一つの学部の下で、総合的に教育研究を行うことを目的としている……中略……人間科学という言葉は、元来、人間に関してその思想や個人的及び集団的な行動や人間のつくり出す諸事象、諸組織について研究する科学の総称として用いられ、旧来の人文科学や社会科学よりも広い総合的概念としてフランスで最初に使われた。日本で学部名称として使用したのは大阪大学が最初で、学問分野としては心理学、教育学、社会学、行動科学等の分野を包摂する総合的な科学の意味で使われ、わが国ではそのような学問を表現する名称として定着している。

本学では、人間をあくまで「こころ」と「からだ」の統合として理解し、現代社会における人間性の回復を「健康なこころとからだ」の回復という視点から究明することを大きな課題としている。したがって、人間の「からだ」「からだの健康」「健康と栄養」などを教育研究の対象とする医学や食物栄養学などの、人間に関わる自然諸科学をも包含し、総合性を一層高めた内容の人間科学の構築を目指す意味で、「総合人間科学」という名称を使っている。」

学科の名称も「人間」を強調するために食物栄養学科を健康栄養学科に、心理環境学科を人間心理学科に変え、短大の後藤美代子、野呂アイ両学科長はじめ多くの先生方の協力を得て、新構想の学科にふさわしいカリキュラム、複数の履修モデル、編入学生の履修コースなどの原案を作っていただいた。さらに大崎先生の発案でキリスト教関連科目や教養科目などの共通教育科目のほかに基幹科目を設け、その一つの総合人間科学概論を必修とし、永く東北大学で哲学を講じてきた輪田稔先生に担当してもらうこととした。一方、菊池事務局長、鈴木寿入試広報課長はじめ事務の方々が高校生と企業を対象に詳細なアンケート調査を行い、学生確保や卒業後の就職の見通しを示すデータを提供して下さった。４月 18 日から上記の事項をまとめる仕事を集中的に行い、４月 22 日、「設置の趣旨」「設置の必要な理由」「学部概要」「両学科設置の趣旨」「教育の内容と方法」「カリキュラム（教育課程）とその特徴」「履修モデル」「エク

ステンションセンターと情報システムセンターの役割と位置づけ」「入学定員と編入学定員」「入試の時期と方法」「定員確保の見通し」「卒業後の進路と就職の見通し」などからなる『設置申請書』を文科省に提出することができた。提出書類の完成までに三浦さんと小島さんが土・日を返上して取り組んで下さった。往時を思い頭の下がる思いである。

この申請書に基づき、６月３日文科省別館で設置審の今田寛、那須壽、志村尚子の３名の大学設置分科会委員による面接審査があった。指摘された主な事項は次の５つであった。

（１）「栄養」と「心理」が集まっただけの大学にならぬよう、総合人間科学部の理念を先生方に周知徹底するよう努めてほしい。

（２） 私学の特徴を出すために礼拝を含むキリスト教教育に力を入れてほしい。

（３） 学生の恒常的確保のためにも、尚絅学院高校との連携を大事にしてほしい。

（４） FD に力を入れ、また自己点検評価の結果を教育に活かす方法を考えてほしい。

（５） エクステンションセンターの位置づけを再考し、生涯教育を推進してほしい。

その後７月 23 日に、学外から採用の 11 名を含む 35 名の教員の個人調書のほか、教員の個人研究室、さらに教室、図書館、保健センター、体育館とグラウンド、課外活動室などの面積や見取図を記載した『転・共用計画書』、備品一覧、基本図書一覧、教授会や各種委員会などの学内組織、学内諸規定、教員の個人研究費および共同研究費を含む教育研究経費とその配分方法など、を記入した膨大な書類を提出することができた。さらに７月 31 日に、男女共学に伴う法人名称の変更、理事と評議員の増員、監事の監査事項の変更などを含む『寄付行為変更認可申請書』を提出した。学校教育法の改正により監事の所掌事項が従来の財政面だけでなく教育事業にまで拡大され、設置審の大学設置分科会による実地調査への出席が義務づけられた。なお、私が着任する前、すでに 2001 年 11 月３日に、大学設置に係る経費と収支決算書などの財政状況を示す報告書を文科省私学行政課に提出し、関係者の努力と、度重なる文科省交渉によって、同年 12 月 11 日に設置審の学校法人分科会より「改組転換」を承認する旨の通知を受けたことを付記しておく。

９月 11 日上記の提出書類に基づき、設置審の大学設置分科会の各専門委員による教員審査があり、①専任教員１名の補充、②一部教員の研究能力の向上、③担当科目の一部是正、④非常勤講師による教育の充実が求められた。

さらに同分科会の志村尚子、菊池龍三郎両委員による実地調査が行われ、①学生の課外活動室を含む施設の充実、②図書館の開館時間の延長と利用度の向上、③学生の満足度の向上、④専任教員の年齢構成の適正化、⑤教員の研究費の一層の充実、が求められた。

次いで 10 月 25 日設置審の学校法人分科会の桐村晋次、島田燁子両委員による実地調査があり、①理事と評議員、とくに教員選出の評議員の評議会出席率の向上、②稟議規定の作成、③社会人受け入れの増進、④財政の情報公開、⑤教育研究経費の充実などが求められ、同時に短大保育科の定員超過の是正策と短大英文科の定員割れ防止策を文科省に提出するよう指示された。

以上の審査と調査で求められ指示された事項について急ぎ対策を講じ、10 月 29 日と 11 月５日の２回にわたり『補正申請書』を文科省に提出し、これをもって大学設置分科会と学校法人分科会の関係書類の作成作業を完了した。

こうして12月19日遠山敦子文部科学大臣より学校法人寄付行為の変更と尚絅学院大学の設置を認可する旨の通知を受けることができた。この認可通知に添えて工藤智規文科省高等教育局長より、「次の事項が認可の重要な条件となっていますので、その実施に遺漏のないよう留意願います。」として次の５つの留意事項を遵守するよう求められた。

（１） 編入学生の受け入れを計画通り実施し、学科の設置趣旨に沿った既修得単位の認定および履修上の配慮に努めること。

（２） 事務処理機能の向上に配慮すること。

（３） 寄付金については任意であることを明記すること。

（４） 短大保育科の定員超過の是正に努めること。

（５） 短大生活科学科食物栄養専攻と人間関係科について、平成15年４月１日で学生募集を停止し、在学生の卒業をもって廃止すること。

なお、管理栄養士の養成をめざす健康栄養学科については設置審関係の書類とは別に、実習室や実験室などの教育施設、設備・備品一覧のほか『臨地実習計画書』と『臨地実習生受け入れ承諾書』を９月24日に東北厚生局保健福祉課を通し厚生労働省に提出し、12月19日の東北厚生局による実地調査を経て、翌2003年３月10日厚生労働大臣より管理栄養士養成施設の認可証を授与する旨の通知を受けとることができた。

1892年にアメリカ人宣教師により設置された尚絅女学会、1950年創立の尚絅女学院短大の歴史と伝統を踏まえ2003年４月男女共学の４年制大学として発足した本学は、2007年に完成年度を迎えたのを機に、短大の英文科と生活創造学科を廃止し、新たに、情報メディアや多面的な表現媒体の発達による文化の変容を見据えた言語・映像・地域文化の３分野からなる「表現文化学科」、現代社会をネットワーク社会という視点から再構成し人権・平和・国際という分野を重視した問題解決型の教育研究をめざす「現代社会学科」、生態・共生・循環型社会というキーワードで表現される“環境の時代”にふさわしい生活科学の再構築をめざす「生活環境学科」を設置し、さらに心理学と健康栄養学の教育研究の高度化と専門的職業人の育成をめざす大学院（修士課程）を創設した。その後2009年には、短大の保育科を廃止し、子供をめぐる社会の高度化・複雑化に対応する幼児教育の充実と小学校教員の養成をもめざす「こども学科」を設置した。こうして本学は、設置準備室の阿部達さんと半澤泰也さんを中心に、改革担当の不破和彦先生はじめ多くの教職員の熱心な支援により、総合人間科学部という学部名にふさわしい６学科構成の学部と大学院総合人間科学研究科（修士課程）を有する総合的な高等教育機関へと発展した。

大学設置に当たっては学校法人が関係書類の作成を一括して業者に委託する例が増えているが、本法人は教職員の熱心な協力を得て、三浦さん、阿部さん、小島さん、半澤さんを中心に一切を自力で成し遂げることができた。しばしば大学の設置それ自体が大学の自己点検であり、教職員の意識変革であると言われている。その意味で、大学の設置準備が尚絅学院にとって大きな自己改革であったことを明記し、関係者の健闘をたたえ、感謝をもって拙文を閉じたいと思う。